

## 対談

## 『これからの全自者協の方向性とは』

日本自閉症協会会長

全国自閉症者施設協議会会長

## 石井哲夫氏／五十嵐康郎氏

## ●五十嵐康郎氏の紹介

1968年日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科在学中に休学し「ひゅーまん運動」創設、翌々年卒業。1971年社会福祉法人滝乃川学園児童部就職。1989年滝乃川学園退職。自閉症者専門施設開設準備に専念、1991年6月自閉症者専門施設めぶき園開園、施設長就任。大分県知的障害者施設協議会副会長、大分県社会福祉施設経営協議会理事、人権擁護委員、豊後大野市障害程度区分審査会委員、九州・山口地区自閉症研究協議会地区委員、九州発達障害療育研究会常務理事等を歴任。

現在、社会福祉法



人萌葱の郷めぶき園園長として、大分県の行政・教育・福祉・保健を対象に3年間の発達障害療育支援専門員養成研修を実施。

今回は、今年度より新たに全国自閉症者施設協議会会長に就任されたという事で、今後の全自者協の活動について語っていただきました。

石井 まず始めに、政権が変わり

障害者政策が徐々に形作られていく中、障害者自立支援法を見直し新しい福祉法を作るということになっていきます。法規的に障害者自立支援法と、ほぼ同時に制度化された発達障害者支援法を組み合わせて考えて欲しいと思います。

私が、なぜ自閉症という名前にこだわるのか。確かに先進国でも、自閉症を発達障害として考えています。しかし、学問的には発達障害という概念は、明らかに知的障害を組み込んだ概念なのです。これに先んじて我が国の障害者基本法で、障害の種別を身体障害、精神障害、知的障害という3障害に抑えました。そして、自閉症はその枠外で付帯事項の中に記載されるにとどまっていたのです。そこで、発達障害者支援法が制定され自閉症を含ませました。それでも不十分なのです。英国・

米国では「自閉症法」という法律が制定されており、また国連では、平成19年12月18日の国連総会において、毎年4月2日を「世界自閉症啓発デー」(World Autism Awareness Day) とすることが決議され、世界各地において自閉症に関する啓発の取り組みが行われています。これに対応し我が国では、世界自閉症啓発デー・日本実行委員会が組織され、自閉症をはじめとする発達障害について、広く啓発する活動を行って

います。これからも頑張ろうと思えます。その辺で、制度にはありませんが、自閉症という障害名を長年前面に出し続け、自閉症者施設として広く活動を展開している全国自閉症者施設協議会新会長のお立場で、基本的な考え方があって思っているので、お話をいただきたいと思っています。

五十嵐 全国自閉症者施設協議会は、知的障がいを伴う自閉症(児)者の支援ということでスタートしました。特に行動障がいを伴う困難なケースに多数かわかってきました。それが私たちのベースではないかと思っています。

そして、全国の自閉症者施設の

多くが発達障害者支援センターの委託を受けています。私の法人(萌葱の郷)でも大分県発達障がい者支援センターECCOALを開設していますが、相談業務の8割ぐらいが高機能の自閉症、アスペルガー症候群で占められていると聞いています。ですから今は、知的障がいを伴う行動障がいの激しい自閉症の人たちと、新たに発達障害者支援センターを経由して、高機能、あるいはアスペルガー症候群の人たちの相談や支援に関わっているというのが、私たちのベースだと思っています。

その中で、例えば萌葱の郷では児童デイサービスや行動援護、ホームヘルプサービスを運営していますが、そこを利用しているのも主に自閉症の人たちです。

なぜ、そのような状況にあるかと言えば、自閉症の人たちの置かれた非常に厳しい状況を、他の機関では真に理解して支援するということが難しいということがあると思います。自閉症支援のノウハウをこれまで一番培ってきているのは、私たちの団体であろうと自負しています。

当初は、知的障がいを伴う自閉

症の人たちへの療育が主でしたが、その中で得たノウハウがアスペルガー症候群や高機能の自閉症の人たちを支援していく上においても、基本的には役に立っているということがあります。そういう意味で全国自閉症者施設協議会の立ち位置は、そこにあるのかと思っています。

発達障害者支援センターにもADHDの方や、あるいはLDの方の相談もあります。しかし、LDの方に関しては、それほどご相談は多くないようです。ADHDの方も年齢が長じるに従い、ある程度社会にも適応していきけるのですが、やはり特にアスペルガー症候群の方に関して言いますと、知的障がいがなくとも非常に社会生活が厳しい状況があります。その支援について、これから全国自閉症者施設協議会が果たして行かなければならない役割があるのではないかと思っています。

私たちは、これまでの歴史的な経緯と現在置かれた状況を見ていると、知的障がいの有無を別にして、自閉症の人たちが最も深刻な問題を抱えているととらえています。

す。ですから、自閉症の人たちの支援のシステムなり、具体的な支援が得られるような状況作りを行わなければならないと思っています。そういう意味で、全国自閉症者施設協議会としては自閉症にこだわっていくべきだと考えています。

石井 我が国では、知的障がいを伴う自閉症(児)者は、法制度上知的障がい(児)者に入り社会福祉の支援資源を活用する。あるいは特別支援教育の対象になっています。それが知的障害の人に対する生活訓練であり作業訓練であったわけです。

そこに含まれない人たちとしては、広汎性発達障害として自閉症の人たちがいたのです。しかし、自閉症の人たちはまず、強制しすぎると行動障害になりやすい人間関係や社会参加の困難な特性がある事を知って欲しいのです。それでも、彼らは発達しないのではなく、30、40歳になってからようやく認知が広がるといったケースがあ



る。限られた人生の仕組みの中では遅すぎるのではないかとという声もありますが、人間として生きていく価値について考えた時に、いわゆる定型発達の人を作ってきた社会の色々な基準に沿えないからと言って、猛烈に訓練してそれだけで済んだだけで良いというものではない。ずっと生活・作業訓練を受け続け苦しんでいる人の立場に立ってみますと、人間としてこのまま放っておくことはできない。かろうじて、先生方が築き上げてきた自閉症者施設において、強度行動障害を示す人を受け入れて、過去にどのような対応を受け

てきたか調査してみると、彼等の障害特性が、今まで教育現場や福祉現場等の立場で関わってきた人達にきちんと理解されていない事が分かったと思います。ですから、自閉症の人たちと生活全てを共にすることによって得られた先生方の自閉症に対する支援方法が有効で、それが知的障害を含む自閉症のみでなく、例え知能が高いアスペルガー症候群の人達に対しても通用する事が分かってきたわけですね。

これも重ねてお聞きしますが、先生は有名な滝乃川学園でずいぶんご苦労されて、その後自閉症の世界に移られてきた。その辺の考え方の変化や特徴を是非お聞きしたいです。

また、実際には施設から地域へ移行していくのは、知的障害者の人が多い。そして、自閉症の人は施設へ残る現実がある。それだけ社会に入りにくいという状況がある中で、先生は両方を見比べて、そこに何かお考えもあるだろうと思うので、その辺も分かりやすくお話ししてください。

五十嵐 私は高校時代のボランティア活動がきっかけで福祉の世

界に入りました。ボランティアとして、ある知的障害児施設を訪問した時に、非常に変わった子どもさんがいました。私たちが一緒に遊ぼうとしても、黒板に緻密な鱗の魚の絵を描き続けていて、全く取り合ってくれない。みんなそれぞれ勝手な行動をしているみたいな場面に直面しました。今思えば、あの子どもたちが自閉症児だったのだらうと思います。

それから学生時代に、滋賀県の田村一二先生の一麦寮に飛び込みで、しばらく居候したことがあります。一麦寮では熱心に陶芸に取り組んでいて、個性的な作品が創られ、東京のデパートで作品展を開いて高い評価を得たりしていました。一麦寮の利用者も今思えば、ほとんどの方が自閉症だったのだらうと思います。

一麦寮の利用者は周囲の人をあまり意識しないで行動するので、利用者の部屋でゴロツと横になれたら職員として一人前みたいなそういう話もありました。それだけ行動障がいも結構あったのでしょうが、私には、彼らは非常に落ち着いて暮らしているように見えました。あれは自閉症施設とは銘

打っていないかったけれども、今思えば、利用者の大半が自閉症だったと思います。

一麦寮と同じ滋賀県に止揚学園という重い知的障がいの子ども施設がありました。施設長の福井先生は、自分たちは教育界の土方だと言っていました。何度もお邪魔しましたが、止揚学園の子どもも、自閉症だったと思います。

そのような経緯があり、田村先生の紹介で、滝乃川学園に勤めることになりました。本当は田村先生のところで働こうと思ったのですが、一麦寮には空きがないし、関西では私のことが知られていて、どこも雇われないだらうから、東京なら雇ってくれるだらうというのと、当時の滝乃川学園の労働条件が厳しくて、職員がなかなか居つかないということから、おそらく職員を募集しているだらうということで紹介されたのです。

滝乃川学園で最初に私が担当することになったのが自閉症の子どものたちの集団だったのです。6、7歳から12歳ぐらいまでの9名の自閉症の子どもたちでした。その時もまだ自閉症ということは、私の認識の中にはありませんでした。

た。とにかく、世の中には、これほど激しい行動を示す知的障がいの子どもたちがいるという強烈な印象でした。

それまで私が見てきた知的障がいの子どもは、コミュニケーションがとれ、発達の遅れはあってもそれなりに理解できました。ところが私が担当した子どもたちは全くそういう範疇にはなくて、自傷から他害から便こねから物壊しと激しい行動障がいがありました。私は自閉症について何も知らなかったのですが、福祉の学校を出ているというだけで、いきなり責任者みたいな形で担当することになりました。

部屋に鍵を掛けて閉じ込められていて、自傷があり、他害があり、便こねがあり、畳をむしった藁屑が毎日、ごみ箱に山盛り一杯になるような状況です。これは何とかしなくてはならないと思ったのですが、部屋の中は臭いし、今と違って当時はエアコンなんていう気のきいたものはありませんし、逃げ出さないために鍵を掛けていますから、夏は暑苦しくて、冬は部屋の中に氷が張るようなところで、みんな寝るわけです。狭い空間の

中で一日を過ごしてそこから出る機会もない。座敷牢のような状態でした。

私としては普通の暮らしを何とか保障したいと思い、畳を全部出して、板の上にパンチカーペットを貼り徹底して掃除をしました。屋外へ少しでも出ようということ、散歩に連れ出したり、教室に連れて行って絵を描かせたり、教材を自分で作って訓練したりしました。

滝乃川学園には当時、重度棟という自閉症の子どもたちだけの棟があつて、ほかの生活棟とは別扱いされてきました。当時、動く重症児と言われていた重い知的障がいを伴う自閉症の子どもたちを社会的な要請から受け入れたのですが、そこに対するノウハウや展望がなかったこと、当時の職員が受け入れに反対したことから、何も知らない新人に任せるしかないようなところがありました。

私が勤める前の年に14、5人ぐらゐの職員が辞めて入れ替わっているのです。そのような状況で職員も一緒に収容されているようなものですから、あまりにも労働条件が厳しく、次々と過労から膀胱

炎や腰痛になって体を壊しました。

私は若かったのと、何とかしなければならぬという使命感だけで耐えていました。職員や子どもたちの間に重度棟に対する強い差別意識があつたことから、重度棟を解体して混合処遇にしようと思つた職員を説得して、約2年がかりで混合処遇を実現しました。さらに当時は重い障がいを持った子どもたちは就学が免除されていて学籍がありませんでしたので、地域の学校への就学運動に取り組みました。

お風呂に毎日入れるようにする。小集団で瀬戸物の食器を使って食事をする。施設の中だけで生活を完結させるのではなくて、個別に外出できるようにする。そんなことにも取り組みました。ノーマライゼーションは、スウェーデンやデンマークでは既に実践されていましたが、日本ではまだ一般的に紹介されていなかったもので、私はノーマライゼーションについて知りませんでした。当たり前前の生活をする事によつて、彼らが成長し発達していくのではないかと考えて取り組みました。

実際にそのような閉じ込められた生活の中から、夏のキャンプに参加したり、食堂でみんなと一緒に食事をすることを提案して取り組むことで子どもたちが変わっていききました。例えば身辺処理の未自立な子どもが、パンツをはくことを教えたわけでもないのに自分でパンツを取つてはこうとしたり、ほとんど歩けなかつた子どもが歩けるようになったり、ですから、そのような本人の意欲や気持ちを育てるためには、彼らを人間らしい状況に置いて、色々な経験、体験を保障していくことが大切なのではないかと考えて取り組んでいきました。

それと合わせて、当時の職員の労働条件が余りにも厳しくて、相変わらず次々と職員が辞めていく状況は変わらないのです。一生の仕事として福祉の仕事に携われるような労働条件にしないと、本当の意味でここに生活している利用者の人たちの福祉もありえないと考へて、労働組合を作り、労働条件の改善と合わせて、生活見直しや就学権の問題に取り組んでいきました。

そしてちょうど東京都の公私格

差は正事業があつたこともあつて、飛躍的に労働条件が良くなりました。私は労働条件が良くなれば、利用者に対する職員の対応も変わるだろう。いわゆるノーマライゼーションを実践していけば、彼らが幸せになるという発想でとらえていましたが、残念ながら職員の間ではあまり変わりませんでした。相変わらず利用者に対する体罰や言葉かけが高圧的であつたり、上から目線でものを言い、こちらの価値観だけを押し付けようとしていました。

私も彼らを取り巻く状況を変えていくという考へ方はあつたのですが、利用者との関係性のあり方が分からなかつたのです。滝乃川学園ではその後、自閉症の子どもたちが増えていったのですが、結局そういう意識では自閉症の子どもと関わっていけない。そして、「自閉症に合った専門的な施設があるのではないか」という話が職員の間でありました。

その中でたまたま、千葉県の袖ヶ浦のびろ学園で行われていた初期のころの「自閉症実践療育セミナー」の研修会に参加しようという話になり、園を代表して私が参

加しました。あの時初めて「そうか、今まで出会って来た人たちはみんな自閉症だったのか」ということと、石井先生の「受容的交流理論」のような考え方があるのだということを知りました。それまで私は関係性ということを全く認識していなかったのです。

ノーマライゼーションと言っていました。結局、訓練という範疇を抜け切れていなかったのです。それ以外に考えることが出来ませんでしたが、「受容的交流理論」に触れて、自分が変わらなければ彼らも変わらぬのだ。まず自分が変わり、子どもとの関係性が変わり、そして子どもが変わる。あるいは子ども自身が発達・成長する。そのことが非常に重要なのだということに、あの時、初めて気付いたわけです。

色々とノーマライゼーションや就学運動に取り組んできましたが、実際のところ当時は、1人ひとりの子どもと自分が、どのように関わればいいのかという事は、正直言うとうまく分からなかったのです。だから、「受容的交流理論」にふれて初めて、そのような考え方があるということに気付いたの

です。

そうすると毎日の支援や業務が、自分の中で180度変わりました。つまり今までどちらかと言えば、「忙しい、忙しい」と、流れ作業のように追いまくられて仕事をしていた意識がありました。だからよく職員の間でも、「だめ」とか「早くしなさい」と、とにかく利用者が何か訴えてきても、それに合う余裕がない状況だったので、きちんと受け止めて、時間がかかっても誠実に対応していければいいのだという、非常に単純な当たり前のことに気付きました。私たちにそれを教えてくれるの



は、自閉症の人たちだと思うのです。教育も含めて対人援助の仕事の本当のあり方を彼らが教えてくれる。彼らの障がい私たちに色々なことを教えてくれる。です。が実は、知的障がいの人たちにも本当は、そのような対応は大事なのだと思っただけです。というのは、それまで知的障がいの人たちが、職員に合わせてくれていたということに気付いていなかったのです。

人に合わせるということは自閉症の人にとって非常に苦手なところですから、パニックを起こしたりするわけです。知的障がいの人

たちは確かに合わせられません。彼らも傷ついているし、彼らに対しては、そのままの対応ではいけないのだということに気付いたのです。自閉症の人たちだからこそ、私はこの仕事の本当のあり方というものをお教えされたのではないかと思っています。

石井 今の話の中で、五十嵐先生が実践の中で自閉症の人権と言いますか、人間としての権利保障の基本を、どこで学んでいたのか伺えて良かったと思います。

もう1つの考え方として、私も自分を振り返ってみると、同じように田村さんから学んでいるところがあるのです。それは何かと言いますと、日本で知的障害教育を進めていた田村さんは、いわゆる特殊学級を担当していました。日本で初めて障害者に関する書籍を世に出して、知的障害者についての啓発を行った方でもあります。彼の考え方は、沢山の本を出して映画化され社会的にも非常に著名な存在になっています。彼は何を訴えたかったのかと後になって考えてみると、人間に物差しをあてはなくて、本人にかなう物差しは、彼は自分の才覚で色々用意しました。つまり田村一二という人は、それぞれの人に合った物差しで、人間の見方が出来る人でした。それは社会の側からではなく、本人の側から見ているということ

です。実はそれは、小杉長平さん(東

京都立青島養護学校創設に深く関わった人」と私が田村さんの所に会いに行った時に、小杉さんが掴んだものを聞くと、私の掴み方といささかずれていました。小杉さんの考え方というのは、当然ですが子どもの特性を考えながらも、知的障害の人の従順さを基本に置きながら生活指導や訓練を通して、彼らに分からせようとしてゐるところでした。

私の場合にはどうしてもそれでは納得がいかない。重要な観点から外れていると感じたのです。このずれを埋めてくれたのは平井信義先生でした。平井先生という人は、非常に受容ということを強調してきたわけです。しかし、それは一般に理解困難であり、私の実践から次に出てきたのは、人間関係を付ける事の重要性でした。平井先生は、自閉症の人には人間関係が非常につきにくいところがあり、それをイギリスの小児精神科



医で精神分析家であるドナルド・ウィニコット(Donald Woods Winnicott)が子育てにおいて「関わること」の重要性を教えてくださいているということでした。このことがかなり自閉症療育の上で重要ではないかと考え、私なりの療育の視点として重視する事になったのです。

そこから母親が子どもにも語りかけ、その反応をキャッチして、きちんと応答していくという、その営みをゼロから自閉症の人にやってみようという考えとなり、「受容的交流」の方向が生じてきたのです。その後「受容的交流」の支

援を長く実践してたどり着いたこととして、「支援者自身が自分とどのように見て振り返るのか」という自己評価です。

確かに知的障害の場合には、向こうがこちらに合わせてくれるという力を持っています。そうすると、自分を振り返らないで関われるわけです。自閉症の人は、相手がどう思おうと自分は自分というところがあるので、そこはこちら側が調節をしながら関わっていかなければならぬわけです。

前号の「全自者協ニュース第35号」で、日本ポータージ協会会長の山口薫氏と対談した時に、それなりの色々な指導が重要である事は私も認めますが、山口氏はどうしても全て指導というところから離れないわけです。

実は先程の質問ですが、自閉症施設の職員と、知的障害施設の職員は、本来は同じ勉強をして現場に入ってきていますが、対象者の特性が違います。しかしながら、福祉現場の支援や教育場面の支援の違いはあっても、支援者が自分のことを考えないで人を支援をすることは、自分の道に相手を押し込んでいくことには変わりはない

のです。ですから私は、そういう意味で、まず自分を問直すことからこの仕事が始まると思っております。

次の課題は、これは最後の結びですが、これからの全国自閉症者施設協議会の方向性は、どのような事を全自者協として政治・行政なり、社会に訴えていくことによって、自閉症、発達障害の人たちに有利な社会にしていけることができるか。「共生社会とノーマライゼーション」に一歩近付ける戦略について、何かお考えを持ちでしたら教えてください。

五十嵐 先生のお話をお聞きしながら思う事は、自分がそのような視点に立って利用者に接してみると、やはり利用者との関係性が、そのことだけでもかなり変わる事に気付いたのです。彼らはそういうことに敏感で、彼らのことを理解しよう、自分を見つめ直そうという姿勢は、理屈ではなくて伝わると思います。

めぶき園で、ほとんど利用者を含めて職員ともコミュニケーションがとれず、親や他の利用者、職員に対しても非常に激しい他害行為があり、すぐ感情が激して、攻

撃的になつてしまふ人がいました。

彼と私は、1泊2日のキャンプを通して一緒に散歩して、彼は音楽が好きだったことから、一緒に歌を歌つてやり取りを楽しみました。それまで彼は、激しい行動障がいがありました。それから毎日、玄関で私に来るのを待ち受けていて、にこにこしながら握手を求めてくるようになりました。そのことがしばらく続いて、彼は次第に落ち着いていくと同時に、そういう行動障がい減少していったのです。

ですからある意味で、色々な状況の中で、むしろ傷ついているのは彼らであり、傷つけているのは回りの社会なり関係者である。そこを変えていかないと、本来の意味で彼らの暮らしはよくならない。だから彼らに問題があると多くの人が思っていますが、行動障がいがあるとか、他害行為があるとか言いますが、そうではなくて、彼らを理解しない社会や、親や支援者も含めたその関わっているスタッフなりに、やはり問題があると思つているのです。環境や関わり方が変われば、彼らは見事に変

わるわけです。

ということは、彼らは、おそらく今まで本当に誰も理解してくれないし、誰にも受け入れられなかったのだと思うのです。私も彼らを本当に理解していたわけではありません。本当に受け入れていたかどうか定かではありませんが、そんな私でも、ちよつとした気持ちを通じたことにより、彼の方から親愛の情を示してきました。

そういうことを私たちはたくさん経験してきたわけです。そういう実際の体験の中から、こちらが変わらなければならぬ。自分を見つめなければならぬ。自分を見つめなければならぬ。単なる理屈ではなくて、これまでの彼らとの体験の中から感じてきたことなのです。

これまでは支援者の問題を等閑に付したまま、クライエントの問題として捉える傾向がありました。クライエントの視点を問題とする視点



からは自閉症や障がいの重さが限界となつてしましますが、支援者の課題として捉えなおすことで、問題解決の糸口が見えてきます。支援者の課題だとの視点に立てば無限の可能性が開けます。これは私は天動説から地動説への転回になぞらえて、自閉症療育のオペルニクスの転回と言っています。

今、そのことを少しでも多くの人に伝えたい。例えば学校の先生であったり、福祉施設の職員であったり、あるいは行政の人であったり。そこで大分県では、発達障がい者支援専門員養成研修を行っています。そのことを伝える

ためには現場に来ていただいて、実際に実践している姿を見ていただくかなければならない。

それはかつて自分が、石井先生が袖ヶ浦のびる学園で利用者の方と関わっている姿を見て、「これは今までのやり方とは違う」というふう思ったのと同じように、現場の実践を通して伝えていく必要があるということ、3年間の期間、初級、中級、上級という研修制度を設けています。その中のメインは、めぶき園やなごみ園で、幼児、あるいは学童、そして青年、成人の人たちと接してもらう、そこで私たちがやっていることを見てもらう、そして理解してもらおうということが、非常に大きいのではないかと思つています。

今申し上げたようなことが分かれば、かなり変わると思います。学校の先生は皆さん、教えよう、教えようとしているわけですが、まずは教えようとする前に、彼らの現実というもの、彼らの気持ちというものをきちんと受け止めて、受容だけではないけないので、こちらから、ここはこうしてみようよということ、折り合いを付けながらやり取りを重ねていくこ



とによって、お互いに成長すると思うのです。

大分県独自の取り組みとしては、世界自閉症啓発デーの記念行事の中で、発達障がい者支援専門員の認定証交付式を行っていません。平成21年度からその人たちを県の予算で関係機関にスパーバイザーとして派遣する事業がスタートしました。平成21年度は15人の専門員が認定され、96件の派遣実績がありました。平成22年度は新たに31人の専門員が認定され、平成21年度の倍の予算が計上されました。

毎年、15人から30人ぐらいが専

門員として認定される予定ですので、10年続ければ200人、300人の、いわゆる私たちと基本的に共通する考え方を持った自閉症の支援に対して理解のあるスタッフが、福祉関係だけでなく、医療なり、教育なり、行政なり、保育なり、様々な機関で育っていく。そのことに

全体の理解を底上げして、支援の質が高まるのではないかと思っているのです、私としてはそこにいちばん力を入れていく必要があるだろうと思っています。

本当の意味で自閉症というものを理解して、頭ごなしに教育したり訓練するのではなくて、彼らと一緒に歩むというか、そういうスタンス、立ち位置で支援し、またそのことをきちんと、他の人にも伝えていけるような人材を育てていくことによって、変わってきています。

そういう意味で言えば、今私どもが実践しようとしていること

は、本当の意味のジェネラリストを育てて、そして社会全体として彼らを支えていける社会を作るということにつながると確信していますので、全自者協でも是非取り組んでいきたいと思っています。

専門家であったり、あるいはドクターであっても、行政マンであつても、自閉症の障がいや行動障がいがあるというふうに考えている方がいるわけですが、そうではなくて、周りとの関係性の問題なのだということを強く訴えていきたいと思っています。

あとは今、できる限り発言して、少しでも彼らがより良く暮らせるように、制度や政策に反映させたいと思っています。小さい組織でどこまでできるか分かりませんが、れども、これまでの経験でいうと、滝乃川学園にいた時には厚生省や東京都にも陳情してきました。

それから支援費制度に移行したときにも、児童デイサービス壊滅の危機に際して、大分県内で3万名の署名を集めて厚生労働省に陳情に行つて、ある程度、変えることができましたので、正しいと思うことに真剣に取り組めば、必ず相手に伝わるといふ信念を持つて

います。制度や政策を含めて自閉症の人たちが本当に幸せに生きられるために提言をし、また働き掛けをしていきたい。もちろん超党派でと、そういうふうと考えています。

石井 ありがとうございます。今、非常に心強く思うことは、まさに自分が経験したことで、自分を変われれば相手が変わるという事を明言された事です。相手が今の行動障害の状態を示している事は、周りが非常に不条理であるという見方をしてくれるような支援者を多く育てていくという、めぐき園、なごみ園でやっている「研修制度」大分モデルを、私も高く評価しています。

それはまさに支援の質という内容の問題ですから、実践しているところを実際にきちんと示し見せていく。それで政治・行政の人が、分かってもらえるような機会を多く作っていただけたらと思います。私もお手伝いしますから、どうぞよろしくお願いいたします。今日はどうもありがとうございます。